

とび た す い し ゅ う

飛田穂洲

学生野球の父 水戸市



(『茨城100年写真集』より転載)

明治19年(1886) - 昭和40年(1965)。東茨城郡大場村〔水戸市〕生まれ。本名は忠順。水戸中学〔水戸一高〕時代に野球選手として活躍。その後、早稲田大学野球部主将として活躍する。新聞社を経て、大正8年(1919)に早稲田大学の専任監督となる。「練習で泣いて試合で泣くな」という信念のもと厳しい練習を続け、黄金時代を築く。6年間の監督を経て、大正15年(1926)に朝日新聞社の記者となり、野球記者として活躍する。「一球入魂」の精神を自らの生き方の上に示す。学生野球の発展に貢献したことから「学生野球の父」といわれる。毎日スポーツ賞、朝日文化賞を受賞。昭和35年(1960)に野球殿堂入りとなる。没後の昭和43年(1968)には県知事より明治百年記念特別功績者として表彰される。

飛田穂洲は、東茨城郡大場村〔水戸市〕の飛田家の二男として生まれました。その後、尋常小学校から高等小学校に進み、そこで野球を始めました。その後、水戸中学校〔水戸一高〕に入学した穂洲は野球部に入り、おもに3塁手として活躍しました。

水戸中学校を卒業した穂洲は、早稲田大学に入学し、3年生の時に5代目の野球部主将になりました。そのころ、国内では野球の強い早稲田大学でしたが、アメリカの大学と試合をしてもなかなか勝てませんでした。明治43年(1910)、アメリカのシカゴ大学が来日し試合をしましたが、力を発揮できずに大敗してしまいました。主将であった穂洲は、その責任をとり野球部を辞めてしまいます。しかし、穂洲は心の中で、(この敗北は決して忘れない。いつかきっとシカゴ大学に負けない野球部をつくるぞ。)と決心しました。

大学を卒業後、読売新聞の記者として、野球の記事を書いていましたが、大正8年(1919)、早稲田大学では、野球部強化のために監督を設けることにし、穂洲に監督になってくれるよう頼みました。穂洲は、(よし、引き受けることにしよう。そして、アメリカの大学に負けない野穂洲球部をつくろう。)と考え、初代の監督になりました。穂洲が33歳の時です。穂洲は、「練習で泣いて試合で泣くな。」を目標に厳しい練習を行いました。

しかし、「野球は勝つことだけを目的としてはいけない。ひたすら練習に励むことによって、選手一人一人が自分の体と精神を鍛えることが大事なのだ。厳しい練習を通してはじめて強い心と体ができる。そして世の中に出ても、りっぱな人間として活躍できるようになる。たとえ、試合に負けても、練習で身に付けたものはすばらしいもの



飛田穂洲の銅像(水戸一高内)

なのだ。」と考えていました。

穂洲に鍛えられた早稲田大学野球部は、黄金期を迎えます。大正14年(1925)、かつて穂洲が主将の時に大敗したシカゴ大学に勝つ時がきたのです。1勝1敗2引き分けのまま迎えた最終の第5戦、中盤まで0対4とリードを奪われていましたが、劇的な逆転で10対4で勝利することができました。穂洲は、(厳しい練習をしたかいがあった。人間やろうと思って努力すれば必ずできるのだ。)と思いました。やっと念願の夢を果たすことができた穂洲は、(監督としての役目は終わった。この後は若い人に譲ろう。)と考え、早稲田大学の監督を辞めました。

監督を辞めた後、大正15年(1926)、朝日新聞社の記者として、新聞を通して大学野球や中学野球〔高校野球〕の記事を書くことになりました。穂洲の野球に対する情熱は、野球記者になっても決して衰えませんでした。穂洲の野球記者としての人生は、その後40年間にわたって続きました。

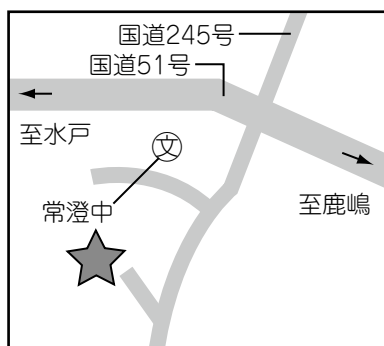
穂洲は、野球選手として、監督として、野球記者として、生涯を通して学生野球を愛し、「一球入魂<一球一球に精神を注ぎ込んでボールに食いついていけ>」の精神を、自分の生き方の上に見事に示しました。日本の学生野球の発展に大きく貢献した穂洲は、「学生野球の父」と呼ばれ、毎日スポーツ賞や朝日文化賞など多くの賞を受賞し、昭和35年(1960)、野球人としての最高の栄誉である野球殿堂入りを果たしました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

飛田穂洲顕彰碑

所在地 水戸市大場町 1584, 1585

内容 この記念碑は、飛田穂洲の業績と偉徳を称えるために、穂洲の業績を刻み、昭和62年(1987)、穂洲生誕の地に建てられました。



おもな 参考文献

『常澄村史通史編』(常澄村・1989)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999) など